生徒に関する不適応観による教師の分類

○宮本正一(miyamoto@gifu-u.ac.jp) 附属親子
（岐阜大学教育学部）（中部学院大学）

key words：教育相談、教師、加齢

I. 目的
中学校等の教育において、生徒の問題行動等を早期に対応するためには、不適応状態を敏感に察知できる感性をもつことが重要である。児童・生徒の適応・不適応を判断するためには教師であり、教師の学歴不適応観の違いが児童・生徒への評価や指導行動に差異を生じさせる可能性がある。

本研究の目的は、中学校教師の不適応観とそれに影響する要因を検討することである。

II. 方法
（1）対象：岐阜県内の中学校15校の、管理職から講師として勤務する教員までのすべての教員、延べ376名。
（2）実施時期：2005年3月。
（3）手続き：各中学校の校長・又は教師、教育相談担当等の教師を通じて、全学校職員へ回答を依頼した。その後、教師個人が回答した封書を、ほぼ1週間を経て学校毎に取りまとめてもらい、郵送により回収をこなした。解答項目「性別」「年代」「経験年数」「校務分掌」「担当有無」、「教師の学校不適応観尺度」40項目と「教育相談体制評価尺度」29項目

III. 結果と考察
教師の学歴不適応観尺度」40項目と「教育相談体制評価尺度」29項目は因子分析の結果、ともに6因子構造と判断した。各因子を各項目の総和を求め、因子間で割ったものを因子項目得点として、本報告では、これら12種の因子項目得点を元にクラスター分析を行い、その結果のみを報告する。

図1はクラスターの樹形図である。「授業中じっとしておれず、立ち歩く」「授業中、授業に関係ないことをして注意を受けても止まない」等の第1因子「反社会性」を生徒の不適応状態と判断するとき重要である認知する傾向は第5＞第1＞第4＞第2＞第3の順に強かった（F[4/371]=56.9, p<.0001）。

「学校ではほとんど話をしない」「一人で遊んだり作業をすることが多い」等の第2因子「非社会性」を重要である認知する傾向は第5＞第4＞第3＞第2の順に強かった（F[4/371]=64.7, p<.0001）。

図1 教師は5つのクラスター（群）に分かれた
これらのクラスターは「性別」「年代」「経験年数」「担当有無」には無関係であった。「校務分掌」を管理職、主任クラス、一般に3分して5つのクラスターとの関係を見ると、管理職は第5クラスターに多く、一般教員は第1クラスターに多かった。

本研究は文部科学省科学研究費基盤研究（C）課題番号15530520；代表府村親子）による。岐阜大学の伊藤秀恵教授、岐阜県教員の越峰塚子氏も協同研究者である。

(MIYAMOTO, Masakazu & Beppu, Ethuko)